



日本記者クラブ

第76回総会記念講演

生きものの感覚

～俳句の魔性～

俳人

金子兜太氏

2010年5月28日

90歳の前衛俳人の旺盛な生命力とおおらかさと深さと明晰さと美しさに直に触れることができた。小林一茶、種田山頭火の生き方や句を引いて、さらには自身の産土・秩父体験をまじえ、俳句の魔性を説明した。

「五欲兼備、煩惱具足」の愚者としての存在と、大昔、人類が森の生活で養った精霊を感じずるような「アニミズム」との両面が、一茶の内面をたどるかたちで語られた。金子さんは後者を「生きものの感覚」と呼ぶ。「森の中には土があり、生きものたちがたくさんいる。みんな平等だということですね。生きものが生きものを愛し合って生きる。個々の生きものに命を認めて、それに精霊を感じずるような状態…」。人は誰もがこの太古の信仰へのあこがれを有する。それを俳人は「原郷指向」と表現した。

斎藤史郎（日本経済新聞専務取締役） 皆さん、こんにちは。日本記者クラブ理事長の斎藤でございます。

本日は、日本記者クラブ総会の記念講演ということで、俳人の金子兜太さんをお招きしております。皆さんもよくご存じの方ではありますが、大変変化に富んだ人生というか、キャリアを歩んでまいられたようでございまして、改めて少し紹介させていただきます。

金子さんは1919年8月、埼玉県のお生まれでございます。1919ということで、イックイック(一句一句)ということで、まさに俳句の道に進むために生まれてこられたようなことではないかと、よくいわれております。

お父様が東亜同文書院で校医をされていた関係で、2歳から4歳まで上海で過ごされました。その後、旧制水戸高等学校から東京帝国大学経済学部に入學され、1943年に繰り上げ卒業で日本銀行に入行されました。その日銀をわずか3日で退職されて、海軍経理学校に入校、翌年には主計中尉としてトラック島夏島に赴任されました。そして、1945年、秋島に移動し敗戦を迎えられました。米軍の捕虜となった後、46年に最後の引揚げ船で復員、日本銀行に復職されたと聞いております。

日本銀行では、組合の初代専従事務局長を務めた後、福島、神戸、長崎の各支店勤務などを経て、1974年に退職されました。

俳句との出会いは高校生のときかどうかっております。お父様も俳人でいらっしゃいましたので、その影響もお受けになったのではないかと思います。お母様が当時「兜太、俳句なんかするもんじゃないよ。あれはけんかだからね」といわれていたにもかかわらず、俳句の世界に入っていかれたようでございます。

日銀時代、約10年にわたって地方で勤務されたわけですが、中でも神戸時代に俳句に専念を決意され、このときがその後の前衛俳句運動の原点となりました。

1962年には同人誌「海程」を創刊、後に主宰されています。1983年に現代俳句協会会長、1988年紫綬褒章、2003年日本芸術院賞、2005

年日本芸術院会員、2008年文化功労者、と数々の榮譽をお受けになっていらっしゃいます。

著書も多数おありで、Amazonで著書を検索したところ、実に160冊が表示されたと聞いております。いまや世界じゅうに広がる俳句の世界の最先端を、いまだに現役で走っていらっしゃいます。

俳句や人間の生き方について、金子さんはいろんなところで、いろんな場所で、いろんな言葉でいっておられます。あるところではこういうふうにもいっておられます。「私は花鳥とともに人間を書きたい、いや、何よりも人間を書きたい」といっておられます。また、104歳まで生きられたお母様について詠んだ句には、こんな、ちょっとびっくりするような表現のものがあります。「長寿の母うんこのように我を産みぬ」というのです。これが名句なのかどうか、私にはよくわかりませんが、多分間違いなく名句なのでしょう。

また、生き方についてはこういうふうにもいっておられます。「本能を制御しない、ユルフン(緩禪)の生き方」——ユルフンというのは、禪を緩くという、その緩禪だと思います。ユルフンの生き方を勧めておられたやにも聞いております。

ということで、本日の演題は「生きもの感覚・俳句の魔性」でございます。どんな話がかがえるか、大変楽しみでございます。

では、金子さん、よろしく願いいたします。

金子兜太 ご紹介いただきました金子でございます。いろいろ前座で申しあげたいことがあるわけですが、というのは、俳人がここへ呼ばれてお話をしたのは初めてだと思います。何かリストをいただいたのには、吉永小百合さんがありましたけれども、俳人はなかった。だから、そういう意味でも、初めはちょっとこちらがビビっていたわけですが、いろいろな事情があつて、だんだんそういうふうなものになってきて、今、非常にさわやかな気持ちでここへ座っております。

いまのご紹介をうけて、前座をいろいろ申し

あげたほうが良いような気になってきたんですけど、時間の関係でそれはやめまして、本論をさせていただきます。

記者になりたかった父親

それでも、ただ一つだけ申させていただきますと、私の父親が田舎の開業医で、秩父という山国の開業医で、そこで死んだ男ですが、おやじが新聞記者志望者だったんです。田舎の農家の長男でございまして、親戚の多い家でございしますが、その連中が集まりまして、みんな貧しかったものですから、一人ぐらい医者にしておけば、自分たちが死ぬときに何とかなるだろう、そういうことで、親戚じゅうを見回して、一番医者になりそうなやつはいねえかと探したんですな。そしたら、私のおやじに白羽の矢が立ちまして、親戚会議で、これを医者にしようというので、独逸協会中学に入れるわけです。

ご承知の水原秋桜子という、「馬酔木」の主宰で、ホトトギスの虚子の有力な弟子の一人ですけれども、水原秋桜子さんと同級生でございました。

そして、医者 of 学校のどこへ入るんだろうかと親戚が期待しておりました。そうしたら、来た電報が、早稲田大学から来たんです。驚きまして、聞きましたら、おれは新聞記者になりたいんだ。だから政経に入った。こういうことで、ここで慌てて、こいつを医者にしておけば、何とか我々も死ぬときは医者にかかって死ぬだろうというような思いでいたわけですから、それがいなくなっちゃうんじゃ大変だというわけで、また親戚会議を開きまして、みんなで哀願しまして、それで医者にした。

そのときに、いまからでも受験できる医者 of 学校はないかというので探したら、二つしかなかった。二次募集をしているのは。そのうちの一つが京都府立医専、いまの府立医大でございしますが、それがあいていましたので、そこへ入った。それで、そこを卒業して、そういう男なものですから、すぐ上海に行っちゃって、いまご紹介のように同文書院の校医をした、と

いう経緯でございます。

私も長ずるに及んで父親の雰囲気というのをみると、どうも医者 of 雰囲気というのではないわけです。最後までそういう雰囲気じゃなくて、やっぱり、なるほど新聞記者になりたかったんだなと思った、そういうタイプの男でした。

そういう点で、私は内心、新聞記者という仕事には親しみを持っております。私も実はそれに——それにとくと、みんなここにおられるのは新聞記者なんだから、それにとくとという言い方は失礼ですが——私もなりたいたいと思ったことは実はあるのでございます。あるのでございすけれども、戦争中だったもんですから、こんなことになったんです。

そういうわけでございます、何となく私は初めビビッておりましたが、だんだんそのことを思い出したら、結局、おやじさんのような面をした人たちがみんなたくさんいるんだろうから、しかも、私より年が多分皆さんは小さいだろう、そう思ひまして、それだったらまあ、私の勝手なことをいわせてもらおう、そういうふうを考えまして、ここに参上した次第でございます。

ちょうど27歳でトラック島という戦地から帰ってまいりまして、それからいろんなことをやりましたが、その中で、例の60年安保、安保闘争、あのときにちょうど東京へ戻って来ていました。10年間地方回りをしておりましたが、ちょうど安保闘争の昭和35年、1960年に東京へ戻りまして、安保の後の空気を直接体験したわけでございます。

そのときに、俳句の世界では現代俳句協会というのが全国組織としてあったのでございますが、それがちょうど安保闘争の翌年、昭和36年に分裂いたします。そして、それまでは社会性なんていうことをスローガンにやっていたんですけれども、分裂してできました俳人協会というのが、虚子のいった「有季定型」、これをスローガンに掲げまして、完全に対決姿勢をとった。そういう現象がありました。

ことほどさように、どんどんいろんなことが変わっていったわけですが、それを目の当たり

に見た。それから間もなく東京オリンピック大会がありまして、そのオリンピックの後で高度経済成長に入ったというわけでございます。

私が 50 歳のとき、ちょうど高度成長経済の終わりごろになりますか、1970 年代の半ばぐらいかな、そのときに熊谷というところへ越しまして、いま熊谷に住んでおります。

人間のナマの姿を知りたい

そのとき、どうも人間というのは、それまで社会の中の人間というような、そういう見方をしておったんですが、社会の中の人間じゃなくて、社会を外して、人間そのものをとくとみないと、どうもいろんなことの判断が十分じゃないんじゃないかというふうに気づきました。遅まきに気づいたと申すべきなんでしょうけれども、気づきまして、それなれば、自分はどうせ俳句をやっているんだから、俳人の先輩たちを見つめてみようと考えた。例えば江戸期の小林一茶——江戸の終わりごろの庶民の俳諧師ですが——あるいは大正期から昭和期にかけて、ほとんど全国とっていいほどの規模で放浪しました種田山頭火、それから、それまでは保険会社に勤めていたんですが、晩年の 3 年間放浪状態に入りまして、小豆島で放浪者のまま死んでしまった尾崎放哉、これも東大を出ているわけですが、そういう連中がいる。

一茶は漂泊者といわれておりましたが、そういう放浪者とか漂泊者、そういう連中のことをみれば、そのありていを見れば、生きざまをみれば、人間の生の姿がわかるんじゃないだろうか。そう思うようになりまして、それで彼らの姿をみようとして、ある程度の勉強をした——勉強したというもおかしいんですが、彼らの本を読んだり、もちろん俳句も読んだわけでございます。

そこで気づきましたことは、命というのが大体わかりました。彼らの姿をみておりましたら、命というのはこういうものだ。人間の命というのはこういうものなんだなと思ひまして、そしてみてみますと、本能と私はいつているんです

が、命というのは本能という触覚を出して生きているものなんだ、ということ自分で気づきました。

それで、その触覚は、世間の中を生きるわけですから、世間の中で触覚を動かしていると、どうしても自分自身も欲にとらわれる。いわゆる「五欲兼備、煩悩具足」という、この姿が軸になってきまして、欲にとらわれる。その欲というものがどうも人間の生の姿から離れられない、ということが一つわかりました。

同時に、一方では非常にナイーブな感性を持っている。これも後から申しあげたいと思いますが、「原郷」、人間の心の中には大もとのふるさどがあつて、その原郷を指向している本能の動きというのがある。それを私は「生きもの感覚」といつているんですが、この生きもの感覚というものを、結構、本能が探り出すというか、求めていくというか、そういう動きもする。そういう触覚の動きもある。両面がある。

それで、この両面があるから、人間、何とか生きていられるというふうなことに気づき始めます。それから、原郷というのは、そこに育ったと思われる生きもの感覚ってどんなものだろう、というふうに思うようになりました。それを見定めてみたい、そんなことで、小林一茶について、とくといま一遍見定めてみようというふうな気持ちになった。

きょうは、そんなことをぐずぐず抽象的なことをいっても始まりませんので、小林一茶について、そのことを私が承知できたことを、ちょっとご報告してみたい、こんなふうに思うわけでございます。

小林一茶は、ちょうど数えの 60 歳のときでございますが、彼は浄土真宗の門徒で、かなり晩年は手厚い門徒だったのですが、如来信仰が厚いわけです。その如来様に向かって、自分は荒凡夫になりたい、と。荒っぽい平凡な男ですね。

私は、一茶の行状とか思いをたどると、荒いというのを、彼は多分粗野というふうな思いで書いたと思うんですが、私は自由と読みたい。また、自分に引きつけても、自由という読み方

をしたい。荒凡夫というのは、平凡で自由な男、平凡で自由な人間というふうに読みたいわけなんですが、荒凡夫でありたい、と。如来様、自分を荒凡夫として生かしてくれ、というふうなことを日録に書いておりました。あの人は毎日毎日日録を書いておりました。

余談ではございますが、亡くなった井上ひさしさんがやっぱり一茶が好きでございまして、一茶のことを戯曲にしております。あの方と対談したときに、自分は戯曲を書くとき非常に遅筆で、俳優さんが待っている状態なのにもかかわらず、自分の戯曲ができないということが多い。ところが、一茶は毎日毎日、恐らく30代ぐらいから毎日毎日、短いものですが、ずうっと日録をつけている。その日録をつけているという、この一茶をみると、自分も毎日毎日日記でもつけていれば、もっと遅筆の解消になったんじゃないだろうか、もっと筆が早くなかったんじゃないだろうか、としみじみいっておられたのを覚えております。とにかく、一茶は丹念に、毎日毎日、短いものですが、書いております。

荒凡夫として生かしてください

ある人から聞いたところでは、漂泊とか放浪者といわれる人には、そういうメモ魔というか記録魔というのが多いという。多分、その範疇に入るんじゃないかと思いますが、彼は旅暮らしの多い男でしたから、そう思いましたけれども、とにかく記録しておりました。その記録の中に、ちょうど60歳の正月のときに、彼は、如来様、自分は荒凡夫として生きたい、ぜひ生かしてくれ、こういって書いています。

その荒凡夫というのはどんなことなんだろうと思いましたが、彼はこんなふうなことを言っている。自分は長年、ずうっといままで60年の間、煩惱具足、五欲兼備で生きてきた。つまり、欲の塊で生きてきた。こういう生き方をする人間のことを、彼は愚だという。自分は愚の上に愚を重ねてきた。「愚」という言葉を使っています。愚の上に愚を重ねて生きてきた。

これ以上の生き方がない。とても心美しくとか、そんなことはとても無理だから、とにかくこの欲のままで生かしてください。それが「荒凡夫として生かしてください」ということだったんですね。

荒凡夫として生きるということは、それでわかるし、私自身も、いまご紹介にあったように自由で平凡な男——。つまり、可能な限り欲を満たしながら生きていきたいというのは、私の理想でもあります。いわゆる偉くなる、名誉欲というのはそれほどございせんから、とにかく自分の思うままに生かしていただく、というのは私の願いでもございますので、一茶をそこでみまして、ああ、一茶の願いとおれの願いと重なるなあというような気持ちになった。

しかし、それにしても、それだけで生きられるという保証はない。どこかその愚を支えていた、心のもっとソフトな部分、やわらかな部分というのはあるはずだ。これは一茶の作品をみればわかるんじゃないだろうか。こう思いまして、一茶の作品、2万句ほどございまして、これはいまでもどんどん発見されております。まだふえております。芭蕉のごときは1,200ぐらいしかないですね。数からいったら問題になりません。一茶の場合はどんどんできるわけですが、それを読んでみました。読んでみたら、そこで、私は生きもの感覚というのを承知できたわけなんです。ああ、これが生きもの感覚なんだ、と。

俳句なんか、ご存じない方もたくさんいらっしゃるでしょうけれども、1~2例句を出させてもらいますと、「花げしのふはつくやうな前歯哉」という句をつくっております。49歳で彼は前歯がふわふわ緩くなりまして、自分の舌でフガフガと後ろから突いて遊んでいたようでございます。暇つぶしをするときに、ふわふわした歯をフガフガさせて遊んでいたようでございます。「ふはつくやうな前歯」というのはそれなんですね。この感じがけしの花びらのようだという、この感覚に、ちょっと私は驚きました。

江戸の終わりごろの人です。文化・文政期に活躍した男です。しかも、庶民です。黒姫高原

の根っこの柏原というところに育った農家の子です。しかも中農です。豪農じゃございません。そういう男が、このふわつく自分の歯が花げしのような感じだという。こんな洗練された感覚、しかもやわらかな生きものの、まさに触れ合う感じ、この感覚を持っていたということに、私は驚いたのでございます。49歳のときの句ですから、驚きました。

生きものをそのままにみる一茶

それから、一茶といえばご承知のこの句が出てくるわけです。「やれ打つな蠅が手をすり足をする」、これは「ハイ」といわず「ハエ」というらしいんですが、「やれ打つな蠅が手をすり足をする」。学者に蠅の生態ということを知ったことがあるんですけども、その学者の説明によりますと、蠅というやつは、どっちが手でどっちが足ということもないんでしょうけれども、4本足があるわけですね。この足の先端で全部のものを識別するんだそうでございます。ですから、ブーンと飛んでいって、私の頭にとまると、あ、これはハゲだとわかる。それから、ブーンと行って、あ、これは刺身だ、こういうふうになる。ブーンと行って、あ、これはクソだとわかる。そういうふうには4本の足の先端部でいつも識別している。

そのために、彼は暇があれば、ここを磨くのだそうでございます。ですから、一茶はそういう害を加えない男だというふうには蠅にもわかっていらしたらしいのでございまして、一茶の前でブーンと——あのころはたくさんおりますから——きて止まった。一茶がそれをポーと眺めていると、蠅は安心してここを磨いている。つまり、先端の感度をよくしているわけでございますね、磨いてやってる。それをみて、ああ、やっているな、やっているなと、一句つくっているわけです。

ところが、どうも学校の先生方はこれを子どもに教えるときに、教訓として教えて、蠅のようなものを殺しちゃいけないよ、と。そういうことを一茶は知っているんだよ、と教えるんで

すが、これは非常に困った教え方でございます。一茶は、人に物を教えるというタイプでは全くないわけです。自分が生きるのが精いっぱいでございますから、そんなことはやらない。まさに愚のままに生きたわけですから。

そうではなくて、蠅よ、おまえは自分の足を磨いておるな、磨いておるなあ、まあ、ゆっくりやってくれやい、こういう気持ちでつくったという句です。これが非常に大事だと私は思っております。

学者の話を聞いてから、その句を見直しまして、至るところで説明をしているのでございませぬけれども、要するに、一茶は生きものというものをそのまま直にみる、そういう本能を持っておった。それが彼の感覚を形成しておった、とわかるわけでございます。

それで、実はこの一茶に注目しました。日本では一茶というのは割合に、ややクラスの低い俳人だという見方がずうっとありました。いまでもそういう見方が多いのでございます。何と云っても芭蕉、蕪村というのはクラスが高いという見方があるのですが、外国の人は案外そういう見方をしておりません。

その中でも、R.H.ブライスという名前のご承知の方もいらっしゃると思いますが、イギリスの人で、日本が大好きで、奥さんが日本人でございまして、朝鮮の京城大学を出たのかな、それからずうっと日本にいまして、敗戦の後、しばらくいまの天皇の家庭教師みたいなことをやっておったんじゃないですか。その間に、彼は禅が好きで、澤木興道師について禅を学びまして、それから俳句に非常に興味を持ちまして、1952年に、『俳句 Haiku』という大きな英文の本を4巻出しております。

その『俳句 Haiku』という4巻の中で、芭蕉、蕪村、一茶、正岡子規、この4人の句を千数百英訳しております。それで1冊構成しておりますが、これがアメリカに非常に大きな影響を与えました。

最後に外国の俳句のこともちょっと申しあげなきゃいかんのかなと思っておりますけれども、少なくとも英語圏の俳句のものは、こ

のR.H.ブライスの『俳句 Haiku』に始まるとみていい、と私は思っております。

いち早く飛びついたのが、ギンズバーグとかゲーリー・スナイダーとか、ああいうビート・ジェネレーション、ビート世代、あの連中が飛びついています。それまでにエズラ・パウンドのイマジズムに傾倒しておったんですが、どうも短いものとなると日本の俳句があるということが彼らの念頭にあったものですから、俳句の正体をみたいという思いがあったんですね。そこへブライスのその本が飛び込んできて、飛びついた。彼らの関心は非常に大きかった。

それから、アメリカにずうっと広がる。イギリスにも渡る、カナダにも行くというふうになってくるわけですが、いま、世界の俳句人口は 200 万を下らないといわれております。これは欧米圏だけでございます。

それに対しまして、いまも待合室でもお話ししていたんですが、そのとき申しあげました中国の「漢俳」もあります。これは五七五に漢字をポンポンと入れれば、それでよい。やはり一字一音ですから。「漢俳(カンパイ)」と中国の人はいつているわけですが、漢字の俳句です。これをやる人も、4 年前に聞いた話では約 4,000 人ぐらいおる。漢俳学会というのができておりますが、それぐらい世界の国でも、俳句をいろんな形で自国語に生かしているんです。が、少なくとも英語圏の俳句のものはブライスにあると思います。それを受けたビート・ジェネレーションにある、こうみております。

だから、アメリカでは、そのときの影響で、小学校の教科書の中にカリキュラムになっているんです。みんな「ハイク」とカタカナで書いております。名刺なんかみますと、「ハイキスト」なんて書いている人もいます。「ポエット・オブ・ハイク」なんて書いてあって、そういう名刺をくださいます、非常にたくさんおります。

これが本当の日本人なのだ

そのブライスが、4 巻本の『俳句 Haiku』を

出しまして、その最後の解説のところで、一茶の句を挙げています。その一茶の句はどのような句かという、「蚤どもが夜永だろぞ淋しかる」。一茶の句には、こいう小動物がたくさんいるんです。動物というんでしょうか、虫というべきですか、これが多いんでございますが、「蚤どもが夜永だろぞ淋しかる」。

一茶は、柏原に 50 歳で帰ります。65 歳で死にますが、柏原に帰ってからの句です。秋の夜長で一人でいる。そうすると、当時は、ノミとかシラミというのは普通の同居者でございまして、むしろノミ、シラミがいない人がおかしいというぐらいの時代でございます。芭蕉もシラミをつぶすというようなことを書いておりますが、当たり前だったわけです。一茶の体は、健康な人だったですから、ノミやシラミが喜んでたくさんくっついていたんじゃないでしょうか。そういうのが、夜中に一人でこうやっているという、体中むずむずしてくるわけですね。そうすると、それを感じながら、「蚤どもが夜永だろぞ淋しかる」というふうな句をつくる。

それをブライスは挙げまして、仏教の影響からこういう心が生まれたんだと思うけれども、これは非常にすばらしいと書いているんです。日本人を代表する——間違っ引用してはいかんと思ってあっちこち書いてきたのが、わけわからなくなっちゃった。ちょっと失礼します(ポケットから四百字詰め原稿用紙大の紙を 2 枚取り出しながら)。こっちはです。ブライスの書いた言葉はこうです。「仏教思想が人間の真性を示している。(中略) この句を読んだ一茶は最も日本人的な人で、最も人間味のある人だ」。

だから、自分は千何百の句、4 人の代表的な句を訳したけれども、一茶のこの句が中心なんだ、という思いでしょうか。日本人というのはこういう人がいいんだ、よい日本人というのはこういうのだ、こういうふうにいるわけでございます。ブライスは禅に造詣が深い人として、この『俳句 Haiku』という本の中でも、俳句と禅が同じだといっています。俳句と禅は同じものだ。そういつて書いているぐらいです

から、それはやや偏りがあるわけでございますけれども、一茶のような人間が、彼の心ではわかるわけですね。非常によくわかって、いかにもこれは仏教がつくり出した日本人の姿で、しかも、これが本当の日本人なんだ、と。そういう見方が出てくるというわけでございます。仏教で、というところがちょっと問題なんでしょうけれども、こういうふうに書いております。

つまり、これぐらいブライスが認めているほどに、一茶のこの句の示しているものというのは、ほんまものの生きもの感覚である。私はそう思います。

こんなことをいうのは蛇足に類するわけでございますけれども、生きもの感覚ということ、私は、アニミズムに対する自分なりの受け取り方で申しているわけでございます。けれども、私は「アニミズム」といわずに「生きもの感覚」といいたい。こういう気持ちでございます。「生きもの感覚」、つまりアニミズムが生まれたというのは、これも学者の話などを聞きながらのことでございますが、どうも人類の初めは森の中にいた。森の生活があって、そこから野に出て歩くようになってきた。こういうことを聞きますが、森の暮らしの中で養われた本能の姿、それが私はアニミズムだと思っております。

アニミズムは宗教なんです

森の中では土があり、樹木があり、生きものたちがたくさんいる。生きものたちが皆平等だということですね。生きものが生きものを愛し合って生きる。個々の生きものに命を認めて、それに精霊を感ずるような状態になって、信仰するというのがアニミズムという言葉の内容だそうでございます。アニミズムというのは宗教なんです。そういう宗教を持っておった。そして、生きものたちが生きておった。

そういうことなのでございまして、何と申しましょか、一茶の心に、生きものに出会って、そこに宗教を覚える、つまり精霊を感ずるというふうなものがおのずから養われていた。そう

いうことでございます。一茶は農家の子で、16歳までは畑を耕しております。天性のものもあつたと思いますが、やはり苦勞の中で逆に養われていたんじゃないか、というふうに思われる部分もあるわけですね。

それで、そういう人類が初期にいた森の中というのが、どんな人にとっても心の中にずうっと残っている。私は、それを「原郷」といいたい。大もとの故郷、原郷といいたいわけでございますが、原郷というものを常に指向しているものが人間にはある。すべての人間にある。そう思うんです。

それを「原郷指向」というふうには私は呼んでおります。何か生まれてきた子どもがいきなり自分が出てきたお母さんのまたをのぞいたというふうな話も聞きますが、これもやっぱり原郷指向。胎児はお母さんのおなかの中にいるあいだも、原郷を夢みているといわれますよね。自分の大もとの人類初期の森を夢みている。そうもいわれているぐらいでございまして、人間にはみんなそれがある。原郷がある。その原郷指向というのが厚いか、うんと薄いかというふうなところによって、人間の質が違ってくる。そうもいわれております。一茶はそれが厚い人であった、というふうに思うわけでございます。

アニミズムでございますが、19世紀ですか、イギリスの人類学者でE.B.タイラーという人のものを、ちょっと私、機会があつて読んだことがあつたんです。このタイラーさんが、「現代アニミズム」ということでいっておりますが、それはどういうものかという、これもあまりいい加減なことをいってはいけないので、書いてきたんです。「生死を問わず、すべてに固有の魂を認めることだ」と（メモを見ながら）。これが現代人にも可能な人がいるということぐらいなんでしょうけれども、可能である。生きているものでも、死んでいるものでも、それに固有の魂をみる。そして極端な例をいえば、「抽象的な概念」にも固有の魂を認めると言う。これが現代アニミズムである、と彼はいつているわけでございます。

これは理屈としてよくわかりますし、そこま

で徹底して命というものをみられるようになるというのは、これはすばらしいと思うのでございます。が、どうも私は、生き死にの死、死んだ人は完全に命がなくなってしまうとは思っていない。また別のところで生きているというのが私の持論でございますから、死んだということも、結局、再生しているということにはなるのでございます。

それでもやはり死んだものにまで魂をみるというのは、ちょっと理論倒れ、論理過剰という感じがしないでもない。抽象的な概念に固有の魂を認める、というようなことは、ちょっと抽象的に過ぎないか、観念的じゃないか、という感じがします。どうもタイラーさんのいうことは平ら（タイラー）に受け取れないのでございますけれども、もっと原始的な意味のアニミズムが一番いい。宗教として、生きものに対する信仰があったという生の姿が、一番私は「生きもの感覚」というものにはぴったりじゃないか、こう思っております。

その^{なま}生の生きものへのいたわり合い、感じ合い、そして信仰にまで至る思いというふうなものが、現代人、かなりの人にあるということを、私は信じております。そういう本能の働きという言い方でいいと思うんですけれども、そういうものがある、こう思っております。

そういう世界なのでございます。もちろん一茶の場合、これは山頭火の場合もそうですが、先に申した愚の世界、世間に入って生きていくためにどうしても募らざるを得ない愚の世界、欲の世界というものと、それから一方の生きもの感覚というもの——非常に生な、固有の魂なんて、そんなきついことをいうんじゃない、もっとナイーブな、感覚的な世界——とが葛藤しているということはもちろんでございませぬ。これが円満に同居しているなんていうことはあり得ないわけでございますから、葛藤している。

ことしから丸儲けぞよ娑婆遊び

一茶は非常に苦勞しております。結局、業俳

で、専門の俳人になったんですけれども、宗匠になれません。なれないというのは、当時の身分社会では、普通の農家の出ではなれないんです。あのころ、宗匠になれるというのは、旗本の藩士、あるいは豪農豪商の人が普通だったわけでございます。一茶は非常に有能な人でして、そういうチャンスは3度ほどあったんですが、なれなかった。宗匠になれませんというと、江戸に座って食っていけない。何をしたかということ、地方の俳人のところを旅で回って歩いて、そこで江戸の話を織り込みながら、俳諧の指導をする。当時は連句が中心ですけれども、連句の付合を指導する。それから発句もやっていたから、発句を指導する。それで、お鳥目をもらって生活していく。

一茶の記録をみると、大体1年のうちの3分の2は地方を歩き回って生活しております。中心は上総・下総でございまして、千葉県のおおかたを彼は歩き回っておりますが、こういう生活をしていましたから、その間に自分の欲もつらせる。それを彼は愚だといっているわけですけれども、これはやむを得ない。だから、年とともに野たれ死になんていうことも心配になりまして、故郷に50歳で帰るんですが、そこでまた……。

奥さんは、27歳のきくさんという人をもらって、初婚です、喜んでいるんですけれども、頭が薄かったものだから、頭を気にしたりしておりました。子どもが4人できますが、4人死んでしまいます。2番目の奥さんは離縁して、3番目の奥さんとの間に女の子ができるんですが、これは一茶が死んだ後で生まれるんです。

一茶は、恐らく別のところにおいて、自分の子どもが、女の子が生まれたというのを聞いて、奥さんが「やを」という人なんですけれども、ああ、やったと思ったんでしょうね、それで「やた」という名前をつけるわけです。彼は死んだ後なので、彼がつけたわけじゃないけれども、恐らく残った連中が、そういうことを靈感で感じたんじゃないですか。私は一種のアニミズム現象だと思っているんですけれどね。生きもの感覚現象だと思っている。残った連中が、一茶が好きな連中が多いから、そういうふうに一茶

の思っていることが伝わった、こう私などは思っております。そんなふうには、子どもを4人も死なせる。

さっきちょっと申しましたように、荒凡夫というとき、その前の前の年、2番目の娘のさとちゃんというのが、これは疱瘡で死んでしまっております。そのショックが大きかったので、彼は中風——いまでいうと脳出血か何かです——で軽い半身不随で、言語障害を起しております。お弟子さんに温泉の主人がいましたものですから、湯田中というところの湯本希杖というんですが、温泉に引っ張って行って、一茶を治療させまして、1年ほどで治るんです。一茶は非常に喜びましてね。57歳でさとを亡くして、58歳で中風になって、59歳、治るわけです。

その59になったときに、正月の初めに書いた句があります。「ことしから丸儲けぞよ娑婆遊び」という句を書いています。これは『ホトトギス』の俳人にいわせると、季語がないといって怒るでしょうけれども、そんなことは一茶にとっては問題じゃない。季語なんていうものも、生活に役立たない季語は要らないと、彼ははっきり書いています。平気で「ことしから丸儲けぞよ娑婆遊び」と。娑婆遊びというのは、この世の中を遊んで暮らしたい、丸儲けだから、そういうことでございますね。そして、その翌年に「荒凡夫で生かしてください」。こうなるわけでございます。

そういうふうには、彼としては非常に苦労してきておりまして、その苦労の中でそういうふうなユーモアが働いている、というところにも、この人のアニミズム感覚、生きもの感覚を、私はみるわけでございます。

それから、ちなみに申せば「ことしから丸儲けぞよ娑婆遊び」というこの句は、小沢昭一さんが大変に好きでございまして、座右の銘にしております。どうぞ皆さま方も遠慮なく座右の銘にさせていただくと、緩やかな生活ができるんじゃないでしょうか。「ことしから丸儲けぞよ娑婆遊び」。この「娑婆遊び」という言葉がいいですね。

そういうわけですが、例えば、ずうっと彼の俳句を読んでみますと、彼は16歳までは農家の子ですから、農業へのあこがれがある。自分が農業を、畑を耕さないということは罪だと考えています。で、こういう前書きをつけた句が3編ほど出てまいります。同じ前書きがつきません。その前書きはどういう前書きかというところ。「耕さずして食らい、織らずして着る体たらく、罰の当たらぬも不思議也」という、これはお聞きでございましょうか。学校なんかでもよくいわれているんじゃないかな。

こう前書きをしまして、最晩年の句は、「花の影寝まじ未来が恐ろしき」。桜の花が咲いて、いまきれいな。この影で寝たい。花の下で寝たいと思うけれども、うっかり寝るといって死んでしまうかもしれない。おれも年だ。そういう句でございます。「花の影寝まじ未来が恐ろしき」。つまり生きたいという欲が一方である。

そういうふうなものがありまして、そういう前書きと、そういう句をつくるようなところに、一茶の中の娑婆を生きていく本能の動きが生む欲と、そして自分の生きもの感覚というものをいたわっていききたい、というふうな思いとが、私はそこで交錯していると思います。それで、こういう前書きと句が出てきている。そう受け取るわけでございます。そういう例が随所に見受けられるわけでございます。

彼の句にはおどけた句が多いんですけども、おどけなんていうことには、恐らくそういう娑婆と自分の生きもの感覚との闘い、娑婆における自分の本能と、生きもの感覚にひかれてきている本能との闘いが、随分あると私はみております。

山頭火の場合の無縄自縛

一茶はそういうふうには生きてきた男です。俳句を使って暮らしてきた業俳でございまして、これが種田山頭火のような放浪者になりますと、この原郷指向、つまり生きもの感覚が非常に強いこともありまして、これだけで生きたいと思うんですね。あの人の場合は、この方も早稲田の

学生さんでございましたけれども、早稲田を酒で中退しているわけです。小川未明なんかが同級生だったわけです。だから、未明とともに文才が非常にあるといわれておった。そういう状態ですけれども、酒でだめになるわけです。

彼はそのころから、自分は生きもの感覚だけで生きたい、原郷指向のままに生きていきたい、もう娑婆は結構だ、こう思うようになった。そして、娑婆、つまりこの社会、社会の中に入らないで生きていくためには、放浪するしかない。というので、彼の場合はある事件を契機に、早くも中年ぐらいから放浪状態、ぶらぶらずうっと歩き回って、ほとんど東北までも行くわけですが、鶴岡から仙台ぐらいまで歩いています。本拠は九州ですけど、ずうっと歩き回っております。放浪を続けております。

にもかかわらず、そういう状態まで来ると、一茶のように、両方闘うという状態よりも、逃げてしまっている。世間を逃げて、生きもの感覚だけをいたわる、そういう状態で生きようとする。

ところが、案外できないんです、それは。皆さま方でもそういうふうにやってみようかと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、これはできません。できませんが、山頭火の場合をみてみますと、世間から逃げて、世間に対する自分の抵抗的な欲というものを養っていくということはなくなっただけでも、自分自身が世間と同じだ、つまり自分の欲の動き、本能の動きが生み出す欲の世界というのは、世間にいてもいなくても同じだということにあるとき気づくわけです。

ということは、金がなくなると、友人だと思える人のうちに入り込んですぐ金をもらう。それから、酒を飲ませてもらう。それから托鉢でずうっと歩き回っていたわけですがけれども、禅僧の端くれでございましたから、托鉢をやっておった。そうすると、托鉢というのは、色街の女性たちが割合にこういうものをたくさん出すのでございます。いまここにいらっしゃる方よりも、彼女たちのほうが気前がいいわけでございます。こういう放浪者に対しては。だから、

出す。

みていると美人がいる。托鉢を終わって帰ってくる。宿屋で酒を飲む。その美人を思い出す。そうすると、のこのこそ美人のところへ行ってお金を全部使っちゃう。そういうことも平気でやる。そういう自分が嫌なんですね。それから、友達のうちへ平気で上がり込んで酒を飲んで、小遣いまでももらっている。その自分が嫌だ。鶴岡へ行った場合なんかすごかったんですが、ガスの集金をしている自分の友人がいました、それが山頭火を尊敬しておったんですけれども、友人は喜んで、温泉宿に連れていって芸者さんを上げてくれた。その芸者さんを上げてくれたのに味をしめまして、それからずうっと泊り込んで、3日か4日そこにいて、全部友人のつけで自分は飲み食いして、芸者と遊んで、そのままずうっと浴衣掛けで仙台へ行った。仙台の連中が怒っちゃった、そんなエピソードがある。

つまり、自分の状態、世間と同じ自分の欲の世界というのが嫌になってくる。それで、彼はよく書きとめておりました。これは、心を無にすればいい、こういう欲の働く本能の世界というものを捨ててしまえばいいんだけど、そういう心を捨てたいと思うと、これを無にしたい、その心を捨てたいということに縛られている。

禅家の言葉に、「無繩自縛」という言葉があるそうでございますね。自分の欲のこころを無にしたいと思うとき、その思いに縛られている。だから、そういう本能を捨てたいと思うこと自身が自分を縛る。本当に自由になるためには、そう思い、求めることを捨ててしまうこと、つまり「空」の世界でなければだめだ。だから、「無」でなく「空」という言葉を山頭火は何遍も書きとめておりますけれども、空を彼は求めた。求めざるを得なかった。

原郷指向で、それ一本で行こうとしても、結局世間からは逃げられても、自分という世間から逃げられない。これが人間の姿です。そのためには、そう思う心を捨てなきゃだめだ、自分を空にしなればいかん、こういうことを書い

ています。

ここまで徹底できればいいですけども、結局、彼も徹底はできませんで、最後は、何となくおのずから空になっちゃったというか、「春の山からころころ石ころ」などをつくっています。結局、犬と一緒に寝ていて、犬の食っているものを自分が食ったり、自分の残したものを犬に食わせたりというような、そういう状態になって、伊予の松山が最後でございますが、ある日、飲んで帰ってきてコロッと死んでしまう。「ころり往生」。ころり往生は、そういう人たちにとっても理想なのでございますね。そんな状態でございます。

ですから、生きもの感覚と、現世を相手に生きていくための本能がつくり出す欲というものの、この闘いの世界というのは、とても一日ではいい切れない。だけど、一茶はそれを生き抜いたということでございます。

それで、時間をにらみながらしゃべっていますが、私のいいたいことの半分しかまだいっていません。私は郷里の秩父に、父親がずうっとおりまして、郷里の秩父で育ったわけでございますが、熊谷に越したのが 50 歳のときです。

秩父は私の産土^{うぶすな}

一茶がわかって、山頭火がわかってきて、いまのようなことがだんだんわかってきまして、自分もやっぱり、自分の中の生きもの感覚というものを養わないといかん。つまりアニミストでありたい、と思うようになりまして、郷里の土を踏む。つまり、そういう心というのは、原始の人間と同じように、森の土が養ってくれているわけだから、自分は土を踏むようにして生きていかなきゃいかん。こう思いまして、郷里の秩父は熊谷から近うございますので、郷里に足を運び、郷里に山小屋をつくって、ときには住んでみたり、無住寺に住んだりいたしました。

そして、だんだん郷土の土というものを踏み返して、味わい返して、昔を思い出すようになりました。「産土(ウブスナ)」という言葉でそれを詠んでおります。郷里の土のことを、そう

いっておりました。いまでもいっております。

そういうふうな状態になって、私にいち早く訪れた昔の思い出がございました。それはどういふ思い出かと申しますと、少年から青年期に入るときだったと思いますが、私は漆にかぶれやすい体質でございました。おばが私に「酒を持って、兜太、来い」というので、連れていかれましたのが漆の木のそばでございまして、「おまえはいま、これから漆の木と結婚しろ」というのです。それで、漆の木に酒をかけ、私も酒を飲まされて、「おまえは漆の婿さんになったんだから、これからは漆の木をいじめちゃだめだよ」。こういうことだった。私は当時、戦争ごっこなんかをやって、漆の木なんかをめったぶったり折ったりなんかしていたわけでございますから、そういうことで戒められた。

そうしたら、不思議や不思議、それ以来、かせなくなりました。田舎の言葉で「かせる」と申しておりましたが、かせなくなりました。そのことを思い出しまして、なるほど、漆の木というものと私という生きものと、両方とも同じ自然であって、自然同士の間には、こういう協和感があるんだということを、思わず、「お、これだったな」と思ったのを思い出します。

一茶の句などもご紹介したいんですが、もう時間がございませんから、やめます。

秩父の話です。私が子どものころに、父親が俳句をつくっておりましたので、父親のもとに集まってくる俳人たち、田舎の 30~40 代の男たちでございますが、この人たちをみていて、野生というものの美しさというのを感じたのでございます。

母親は、その野生の男たちが、「酒なくて何の俳句ぞや」でもって、句会が済みますとみんな酒を飲む。それを私の母親が無理して調達してというか、準備をして飲ませる。必ずけんかをいたしました。そのけんかをみていまして、「兜太、おまえは俳句なんかつくっちゃだめだよ。俳句をつくる人間はけんかばかりしている。けんかをしている人間なんていうのは、あれは人非人なんだ。俳人と書いて、おまえ、何と読む」というから、そういえば「ニンピニン」と

読む（笑）。だから、あれは人非人だ、そう思わせられまして、母親から、「おまえ、俳句なんかつくっちゃいかん」と。

私も旧制中学時代は、母の言葉を守って、つくらなかったんでございますが、旧制の高校に入ってから、一人、とてもおもしろい先輩に出会いました。この先輩のことも実はくわしく申しあげたかったんですが、星製菓をつくった星一の愛人の子なんですけれども、これが大変おもしろい。私は人生で二人、天才と思う人に出会っておりますが、その一人だと思っておりますが、この牽引力に引きずられて、とうとう俳句の世界に入ってしまうというわけなんでございます。

自分が俳句だと思えるようになる

それまでは、母親が厳として私に俳句をつくらせなかった。人非人になるな、というわけですね。ところが、どうも「人非人」の「人」が、普通の人じゃなくて、生きもの感覚に満ち満ちた野生の男たち、そういう本物の人間、ほんまの人間。だから、この人たちは真人じゃないのか、というのが、いま私のイメージのなかにあるのです。あそこで出会った、俳句をつくっている、秩父の山里の30～40代の男たちは、あれはほんまの男たちだ、こう思ったりするわけでございます。

それから、父親が「秩父音頭」というのをやっけてまして、毎日毎日七七七五の「秩父音頭」がうたわれて、私は小学生でもって、寝るときに、枕のもとに響いてくるわけです。それでいつの間にか体中に七七七五が染み込みまして、七七七五は五七調でございますから、五七五と同じでございますので、五七五が染み込んで、そして私のような男ができあがった。だから、ほんまの野生と、五七五の形式がくしくも結びついて、そこに生きもの感覚が育つという思いがあります。

そして、いつの間にか私は自分が俳句だと思えるようになりました。よく気取った言い方で、私にとって俳句はアイデンティティーである

と、このアイデンティティーなんていうわけのわからない言い方をすると、とても得意でございまして、よく人様の前でそういっております。そういう思いにいまなっているのは、あそこが原点なのでございます。

時間がないので、がつがつ急ぎながらしゃべっていますが、実は船橋洋一さんから少し外国のこともしゃべれといわれておりまして、その船橋さんがそこにおられるので、ちょっと逃げられないので、しゃべります。

いま、外国で200万を下らない。特に英語圏で、さっきのブライスをきっかけに大変な数になっているということをおしあげた。そのときの中心の一人だったゲーリー・スナイダー、この人に、愛媛県がいま国際俳句賞というのを出しているのですが、その国際俳句賞をおくることになりまして、スナイダーさんが数年前ですが来日しました。いろいろお話を承ったんですが、そのお話の中で彼がいつているのに、俳句というのは——この言葉が非常に貴重な言葉だと思っているんですけども——「一個の完結したイメージ以上のものである」という言い方をしました。一個の完結したイメージだけじゃない、と。

特に欧米の人たちは、俳句とは何ぞやというのを非常に考えております。ただ「俳句的瞬間」ぐらいの考え方が割合多くて、俳句的瞬間というもの、それをとらえることが俳句なんだというぐあいに思っているんですけども、どうもそれだけじゃ満足しない人がふえている。ということは、俳句というやつを、ハイクを自分たちの生活の中に文化人として肥やしていきたい、自分たちの文化を養いたい、そういう考え方なんです。

それから、短い詩であるというのが非常に魅力でありまして、三行で書くのがほとんどのようでございますけれども、三行詩を書くことによって、最も短い形式の詩に親しむ。それに親しむことを通じて、自分の生活の文化を肥やしていきたい。そう考えている。考えているんだけれども、それだけじゃないものがどうもあるんだ、あるんだと、皆、心ある者は思っている

ようでございます。

一個の完結したイメージ以上のものである

このゲーリー・スナイダーさんみたいな人が余計そういうことを感じる方なのでございましょう、この言葉を私たちとの話の中でしておられました。「一個の完結なイメージ以上のものである」と。

そして彼は、「国際非日本語ハイク運動」、日本語でない国際的なハイクの運動、これをやりたい、と。だから、単なる短い詩であるとか、単なる映像を楽しむというだけのものじゃない、もっと奥深いところの味わいをつかみたい。そのためには、日本の俳句というものをもっと勉強したいというので、彼は京都へ来て座禅までしております。そういう考え方、これが、いま一番本気になって行われている、俳句というものを考えている人の姿だと私は思っております。

それで、私が子どものときに体験して、体にしみ込ませましたほんまの人間と思えるような野生の人。その人たちとともにある五七調の、これを「民族詩」と私は申しますが、民族詩としての俳句。これをもっともっとスナイダーさんに学んでもらいたい。スナイダーさんにも学びたいというお気持ちがある、そう思っております、だから、まだまだ国際的なハイク

は経過途上でございまして、これから本当に彼らはハイクというものの神髄がわかる。わかったときは、日本の俳句がまたわかるときであろう。我々が本当に手が握れるときであろう。こう思っているのでございます。

舌足らずでどうにもならんわけですけども、前方にとにかく時計があるということが非常に悪いわけでございますから、これをにらみながらのことなので、ご勘弁いただきたいと思っております。どうも失礼いたしました。(拍手)

斎藤 大変興味深い話をどうもありがとうございました。時計が邪魔でございましたけれども、日本記者クラブから、お礼に記念品をお贈りしたいと思います。

それから、始める前に、控え室で一つだけ選んで書いてくださいということで書いていただいたものをご紹介します。読み方を間違えていたらいけませんけれども、先生の俳句で、「水脈(みお)の果炎天の墓碑を置きて去る」という句。戦死者に加え、糧道を断たれた状態で多くの餓死者がでたトラック島、海軍主計中尉として一年の捕虜生活を送って、帰ってこられるときに詠まれた句だそうでございます。(拍手)

(文責・編集部)